第 119 回日本外科学会定期学術集会　抄録

題名：ステージ IV 大腸癌に対する原発巣切除による CEA 値変化のバイオマーカーとしての意義
英語題名：Early elevation of CEA levels after primary tumor excision for advanced colorectal cancer is a biomarker for poor prognosis regardless of preoperative levels of CEA.
本文

【背景】がんゲノム医療の躍進による有益性はステージ IV 大腸癌治療においても論を待たないが、施設の均てん化や費用,適切なバイオマーカーの選択等の問題点がある。Carcinoembryonic antigen（CEA）は簡便に測定可能であり、経過観察中のバイオマーカーとして定期的な測定が推奨されている。ステージ IV 大腸癌に対する原発巣切除による CEA 値変化のバイオマーカーとしての意義を検討した【方法】対象は 2006 年から 2017 年までの期間に当院で診断治療したステージ IV 大腸癌原発巣切除例 140 例. 術前後の CEA 値が明らかでない症例は除外した。術前の CEA 値に関わらず、術後に CEA 値が上昇した E 群（n=51）、下降したか基準値内（0.0-5.0ng/ml）であった R 群(n=89)について各臨床病理学的因子, 治療関連因子と診断時からの生存期間との関連を検討した。切除から術後 CEA 値測定までの期間は二群ともに 23 日で差はなかった(p=0.7191)。【結果】術前 CEA 値は 110 例(78.6%)で上昇あり、このうち術後低下 63 例（57.3%）、上昇 47 例(42.7%)。E 群と R 群間で年齢、性別、ECOG PS、原発巣部位(C A T/ D S RS Ra Rb)、TNM stageIVa/IVb、壁深達度、リンパ節転移、肺転移、腹膜転移、組織型、術前 CEA 値に差はなかった。E 群では肝転移例（86.2% v.s. 55.1%, p=0.0002）、および転移臓器数が複数の症例（47.1% v.s. 31.5%, p=0.0139）が有意に多かった.転移巣切除頻度、化学療法施行頻度に差はなかった。全生存期間および腫瘍特異的生存期間中央値はそれぞれ E 群 14.9 ヶ月 v.s. R 群 33.3 ヵ月（p=0.0414）、E 群 14.9 ヶ月 v.s. R 群 35.1 ヵ月(p=0.0060)であり、R 群で有意に良好であった。【考察】ステージ IV 大腸癌に対する原発巣切除前後での CEA 値変化は,術前値の高低に関わらず予後予測バイオマーカーとして有用な可能性がある。